大切なものは目に見えないか？

―パトナムの形而上学的実在論批判―

中村正利

本論文は、「大切な何かが決して目に見えないところにある」という考えについて論じる。まず最初に、この考えがどのようなものかを、これと正反対の考えと対比しつつ規定する。第二に、「真理」とは、まさにこの「目に見えないもの」に属するのではないか、という考えを論じる。真理についてのこの考えは、一見したところ非常にもっともらしいにもかかわらず、H．パトナムは、真理が目に見えないものに属するという考えを「不可解」なものとして批判した。そこで、第三に、このパトナムの議論を概観する。そして最後に、パトナムの議論に対してどのような反論がなされているかをみてゆくこととしたい。

一　ふたつの立場

サン＝テグジュペリは、『星の王子さま』の中で、王子さまと友達になるきつねに、ある「秘密」を語らせている。「かんじんなことは、目には見えない」というのが、その秘密である。サン＝テグジュペリは、この「秘密」を、さらに、星の王子さま自身と、主人公の飛行機乗りの口からも語らせている。この「大切なものは目には見えない」という主張は、明らかに、『星の王子さま』が訴えようとしている主題のひとつになっている。本論文では、「最も大切な何かが、目には見えないところにある」という主張を、サン＝テグジュペリがそこにこめた意図とは全く独立に（つまり、勝手に）、ひとつの思想を表現するスローガンとして借用したい。

この主張とちょうど反対の主張とは、どのようなものであろうか？「目に見えることこそが（それのみが）重要なのだ」というのが、それであろう。しかし、各瞬間瞬間に目に見えているもの、五官で経験しているものだけで、人間に必要なもののすべてを成り立たせようというのは、無理な話である。我々は、実際に直接経験したことのないもの、さらには、五官では直接経験することができないものについても、多くのことを信じている。例えば、クォークなどといった微視的な対象を直接目で見ることは不可能であるにもかかわらず、現代科学は、それについての膨大な信念を含んでいる。そうした信念の一切を、それを直接経験したことがないという理由

で認めないなどということはできないであろう。「目に見えることこそが重要なのだ」という考えとして、そうした極端なものを採ることはできない。

では、「アンチー星の王子さま」の立場は、どのようなものになるであろうか。例えば、二十世紀の経験主義を代表するウイーン学団の中心的メンバーであったカルナップは、次のように考える。人間がそれを通じて世界にアクセスできるルートは、専ら五官による経験のみである。従って、世界について何らかの主張をなそうとしている命題はすべて、経験的に検証可能でなくてはならない。ここで、カルナップは、検証可能な命題を、直接的に検証可能なものと、間接的に検証可能なものとに分ける。カルナップは、直接的に検証可能な命題の例として、「青地に赤い四角が見える」というものを挙げる。この命題は、我々の経験によって、直接検証可能である。これに対し、カルナップは、間接的に検証可能な命題の例として、「この鍵は鉄製である」を挙げる。ここでは、明らかに、「鉄である」は、直接的に観察可能ではない性質の一例として提示されている。つまり、この命題は直接的に検証可能ではない。しかし、「直接的に検証可能ではない命題Pは、Pと他の既に検証された命題とから演繹される命題の直接的検証によってのみ、検証されうる」という意味で、間接的に検証可能である、とカルナップはいう。例えば、命題「この鍵は鉄製である」については、次のようにいえる。

①もしある物体が鉄であるならば、それが磁石のそばに置かれれば引き付けられる。

②いま鍵とともに物体Aが目の前にあるが、Aは磁石である。

③いま鉄かどうかを確かめようとしている鍵はAの近くに置かれている。

①は物理法則として、②は何らかの形で、③は直接的観察によって、「既に検証された命題」であるとしよう。「この鍵は鉄製である」という命題とこれらの命題を組み合わせることによって、「この鍵はAに引き付けられるだろう」という帰結が演繹される。この「この鍵はAに引き付けられるだろう」という命題が、「P（目下の例では、『この鍵は鉄製である』）と他の既に検証された命題（目下の例では①、②、③）とから演繹される命題」である。つまり、命題「この鍵は鉄製である」は、たとえ直接的に検証可能でないとしても、その鍵がAに引き付けられるかどうかを直接観察して確かめることによって、「間接的に検証可能」なのである。[1]「目に見えることこそが重要なのだ」という立場でも、このような形で、直接的には経験しえないことに関する信念を救うことができる。

では、直接的にも間接的にも検証可能でないような命題の身分は、カルナップの立場では、どうなってしまうのであろうか。彼は、「あらゆる経験を超えているような何かについての知識を表すと主張するあらゆる命題を、形而上学的命題と呼び、それらを（認識的には）無意味だとみなす。我々は、こうしたカルナップの立場を、「基本的に重要なのは目に見えるものだけである」とする立場の代表とみなすことができるだろう。

カルナップ、ならびに、論理実証主義の立場は、手厳しい批判にさらされてきた。そうした批判者の代表として、クワインがいる。

クワインは、経験によって裁きを受けるのは個々の命題ではなく、世界についての我々の理論ないし信念体系の全体であるという、よりホーリスティックな立場を採った。しかし、クワインも、世界に関して我々が持つ信念の体系を支える証拠は専ら経験的な証拠のみであると考える点で、経験主義の立場に立ち続けている。

さて、本論文では、「本当に大切なものは目には見えない」というスローガンのもとに、いまみたような立場と正反対の思想を考えてみたいわけである。では、その思想とは、どういうものとなるであろうか。

「本当に大切なものは目には見えない」というスローガンによって代表させたい立場がどのようなものとなるかを明らかにするために、遠藤周作の小説『沈黙』の世界に助けを借りることとしたい。この試みは、実質上は比喩的な形としてでしかないかもしれないが、我々が考察しようとしている「大切なものは目には見えない」という思想の背後にある精神を理解する助けとなるであろう。この小説の主要なテーマは、「神の沈黙」である。この小説の主人公、ポルトガル人宣教師ロドリゴは、キリスト教布教のため、キリシタン弾圧下の十七世紀の日本に渡航する。しかし、彼は捕えられ、彼とともに捕えられた日本人キリシタンは、次々と彼の前で拷問にかけられ、殉教してゆく。彼は耐えられず、問う。「主よ、これだけの惨劇を前にしても、あなたは我々に救いの手をさしのべようとはせず、沈黙したままだ。それは一体なぜなのだ。これ以上、わたしを、不可解なままに放っておかないでくれ。」しかし、神は、ロドリゴの叫びに応じず、沈黙したままである。「神は果たして存在するのか」という問いが、このパードレの頭にまとわりつく。

ロドリゴは、結局、踏絵を踏む。表面上、彼は、「転んだ」ように見える。しかし、彼は、キリストが踏絵を踏むことを彼に赦し、さらには、彼が踏絵を踏んだときのその痛みを分かち合うためにキリストが存在しているということの中に、逆説的にもその中にこそ、信仰をみいだす。だが、我々はむしろ、神の沈黙という状況を前にしてロドリゴが苦しみ、悩むという、小説の中に何度となくあらわれる場面の方に焦点を絞りたい。

神は、ロドリゴの呼びかけに決して応えず、沈黙したままだった。ここで、この事態を本論文のテーマに近づけてみたい。つまり、この事態を、いわば、神はロドリゴの「経験」のどこにもあらわれなかったのだ、と表現してみたいのである。そして、その上で、「本当に大切なものは目には見えない」と考える立場を、次のように規定してみたい。「本当に大切なものは目には見えない」と考える立場とは、何か「本当に大切なもの」が、決して人間の経験には与えられてこないようなところにある、つまり「目には見えない」ところにある（まさに『沈黙』における神がそうであるように）、と考える立場である。これは、『沈黙』の世界に当てはめていえば、たとえ（ロドリゴの場合のように）決して神を経験しなかったとしても、それでもなお、経験を超えて神が存在することを信じるような立場であるといいうるであろう。

先のカルナップに関する議論では、「経験」を五官による経験に限定した。そして、そうした経験による直接的、間接的検証ということを議論した。もちろん、この狭い意味でも、神の存在を確かめ

られるような経験はロドリゴに与えられなかったといいうるであろう。しかし、「ロドリゴの経験に神があらわれない」というときには、もっと違うことが考えられるべきであろう。「神を経験（あるいはここでは『体験』ということばの方が適しているかもしれない）しなかった」ということの中には、例えば、奇跡という形で神が自らの存在を「示す」ということがなかったとか、ロドリゴが神の存在を「実感」するような出来事を全く経験しなかったとかいうことも含まれるであろう。こういったわけで、カルナップについての議論と『沈黙』の事例とは、（特に「経験」とか「検証」といった概念をめぐって）うまくかみあっていない。（カルナップなら、恐らく、「神は存在するか」という問い自体が、明確な検証可能性の規準を持たない無意味な問いだというであろう。）しかし、『沈黙』の事例は、我々の問題にかかわる、本質的に重要な一点を突いている。それは、『沈黙』の神が、あらゆる経験を超えているという点である。経験には全くあらわれてこなくとも、経験の背後に、我々の経験的世界を支え、支配し、統べている、真実の「本当に大切な何か」があるのか？これこそが、ロドリゴが直面し、我々も直面している問題である。人間が直接ないしは間接的に確かめることのできる範囲の外に存在するそうした「何か」（「形而上」の何か）に積極的な意味を見いだすことを厭わないのが、「大切なものは目には見えない」と考える立場の精神である。

ひょっとしたら、世の中には、経験的探求の対象ではないと思われてきたもので、実は経験的探求の対象であったと判明するようなものがあるかもしれない。だから、「目に見えないもの」とは、「直接的にも、間接的にも、あらゆる点で決して経験にひっかかってくることがありえないもの、絶対に経験的探求の対象とはなりえない超経験的なもの」を意味するのでなくてはならない。また、本論文は、人間には、通常の経験能力を超えた神秘的能力があって、それによって、我々は形而上の何かにアクセス可能なのだ、と考える立場を採らない。

二　真理

神の存在、人生の意味、死後の生といった問題はいずれも、これまで規定した意味で「目には見えない」側に属する事柄であると思われる。しかし、ここで登場を願いたいのは、「真理」という概念である。というのも、「真理」もまた、「目に見えない」側に属する事柄だと思われるのである。従って、次の問題提示はこうなる。真理という概念は、あらゆる経験を超えたところにある事柄にかかわる概念なのではないか、つまり、「真理」は、「目に見えないもの」だと思われないか。真理という概念がそういうものだと考えられる根拠を、次に挙げてみよう。我々が「水槽の中の脳」でありうるということが、まさにその根拠となる。

「水槽の中の脳」のストーリーがどんなものだったかを、パトナムの文章を引用することによって、ここで復習しておこう。そのストーリーとは、次のようなものであった。

「あるひと（あなた自身と考えてもよい）が邪悪な科学者によってある手術を受けたと想像せよ。そのひとの脳（あなたの脳）は身体

からとりはずされ、脳を生かしておくための培養液の入った水槽に入れられている。神経の末端は超科学的コンピューターに接続され、そのコンピューターによって、脳の持ち主はすべてが全く平常どおりだという幻想を持たされる。人々も、いろいろな対象も、大空等も、みなあるように思われる。しかし、本当は、そのひと（あなた）の経験していることはみな、コンピューターから神経末端に伝わる電子光学的インパルスの結果なのだ。そのコンピューターは非常に賢くて、そのひとが手を上げようとすると、コンピューターからのフィードバックによって、そのひとは手が上がるのを『見』たり『感じ』たりすることになる。さらに、プログラムを変えるだけで、邪悪な科学者は彼の思い通りに、どんな状況や環境をも、犠牲者に『経験』させる（幻覚を生じさせる）ことができる。脳手術の記憶を抹消することもできるから、犠牲者は自分がずっとこういう環境にいたのだと思えるだろう。[3]」

我々は、自分には手があると思っているし、世界には木やねこといったものが存在すると思っている。しかし、我々が水槽の中の脳であるということがありうるとしてみよう。そうすると、本当は我々には手などないかもしれないわけである。それならば、木やねこも、本当の世界に存在しているものなのだろうか。そんなものは、そもそも本当の世界には存在しないかもしれない。もしかしたら、本当の世界の姿は、我々が思っているものとは全く異なったもの、我々の想像を絶するようなものなのかもしれない。スーパーコンピューターは、本当の世界の姿とは全く異なった「世界」を、実は水槽の中の脳である我々に見せているのかもしれない。パトナムは、本当の世界には、コンピューターと水槽の中の脳たち以外には、何も存在しないのかもしれないとさえいっている。[1]

水槽の中の脳が持つ、その脳が外界についての信念であるとみなしているものは、たとえそれがその脳にとってどんなにもっともらしく思われようとも、ことごとく「本当は偽」である、といいうるように思われる。というのも、世界の本当の姿は、ことごとく、それらの信念のとおりにはなっていないからである。しかも、水槽の中の脳は、自分が持つそれらの信念が「本当は偽」であると気づくことは決してないであろう。従って、我々が水槽の中の脳であるかもしれないという可能性を認めることは、世界が、我々が気づきえないような形で（我々の経験を超えて）、我々が信じているのとは全く異なった姿をしているかもしれない、という可能性を認めることである。それは、外界に関する我々の信念についての全面的懐疑論、あるいは、外界についての不可知論の余地を認めることに他ならない。それは、たとえ我々にとってそれらの信念がどんなに正しいものと思われ、我々の経験がどんなにそれらの信念を支持するとしても、それらの信念が、世界そのものの姿からすると、全く間違っているかもしれないという可能性を認めることである。

我々は水槽の中の脳でありうるし、従って、我々が持つ、世界についての信念がことごとく偽だということがありうる、という考えに共感をおぼえるひと、従って、我々の持つ世界についての信念に関する全面的懐疑論や外界についての不可知論が成り立つ可能性を認めるひとは、「真／偽」という概念について、サン＝テグジュペ

リ的な精神を持っているひとである。そういうひとは、我々人間がどんなに経験を積み重ね、その経験に基づいた信念（体系）を持ったとしても、その信念体系が真なのか偽なのかいった問題は、その経験一切を超えた問題である、と考えているわけである。「人間のできる範囲でどれだけ経験的に確かめられていることでも、真であるとは限らない。『経験的に確かめられている』と『真である』とは別のことなのだ」と、そのひとは考えているのである。もし、我々が水槽の中の脳であれば、真理は決して「目には見えていない」。だから、我々は水槽の中の脳でありうるということを認めるひとは、「真理」という概念が、「目に見えない」側に属する概念であると考える立場に立っているわけである。この立場に従えば、信念が真であるかどうかということは、経験を超えている、形而上の問題なのである。これこそがまさに、パトナムが、真理に関してこうした観点を採る立場を「形而上学的実在論」と呼んだゆえんであろう。

形而上学的実在論者は、「理想的な理論でさえも偽でありうる」と主張する。これこそが、形而上学的実在論という立場の最大の特徴である。ここで「理論」といったときには、我々が世界について持つ信念全体がひとつの体系の形へとまとめられたものが想定されている。また、そうした理論が「理想的である」とは、それが、我々からすると、もはや何の文句もつけられないほど、完璧な理論であるということを意味する。例えば、その理論の正しさは、経験的には文句のつけようのない形で確かめられており、その理論を反証するような経験的証拠は決して得られない。また、この理論は無矛盾であり、形式的にみても非常に美しい形をしている。つまり、「理想的な」理論とは、我々からすると、どうみても正しいと思われるようなものなのである。実際、その理論が偽だということを知る手段は、もはや我々には全くない。我々が経験的に世界について知りうることはすべて、完全に理想的理論の中に表現されているといってよいのである。それにもかかわらず、そうした理論が実は偽であるということがありうると、形而上学的実在論者は主張するのである。（もちろん、我々は、目下そうした理論を持っていない。しかし、もし我々がそうした理論を獲得するに至ったとしても、その理論が偽である可能性がまだ残ると、形而上学的実在論者は主張するわけである。また、そうした理想的理論を表現する言語とは、何らかの理想的言語であると考えるべきであろう。）

我々が水槽の中の脳であるとしてみよう。そうすると、我々が持つ信念は、それがどんなに「理想的」なものであったとしても（我々が得る経験がどんなにその信念を支持しており、その信念が我々にどんなにもっともらしく思われようとも）、世界の本当の姿からすると、「本当は偽」である。こうして、「我々は水槽の中の脳でありうる」ということを認めることは、「我々の理論は、たとえ理想的であったとしても偽でありうる」ということを認めるためのひとつの道だということができよう。

三　パトナムの論証

パトナムは、右でみたような形而上学的実在論の考えが成り立たないと主張した。正確にいうと、形而上学的実在論の考え方は不可

解な（unintelligible）ものであるというのが、パトナムの主張である。ここで、こうした主張を導くパトナムの議論をおさらいしておこう。

右で述べたような理想的理論が、一階の理論の形でまとめあげられたとしよう。この理論は我々にとっては文句のつけようがない程すばらしく、従って当然無矛盾なのであった。ところで、ゲーデルの完全性定理（のモデル論ヴァージョン）によれば、無矛盾である一階の理論はモデルを持つ。そうすると、下向きのレーヴェンハイム＝スコーレムの定理によって、この理論は可算モデルをも持つということが帰結し、さらには上向きのレーヴェンハイム＝スコーレムの定理によって、この理論は任意の濃度の無限モデルを持つということが帰結する。つまり、この理論を真とするようなモデルは、どんな無限濃度のものでも存在するのである。そこで、「本当の世界」と同じ濃度を持つモデルMを選ぼう（ここで、「本当の世界」も、ある濃度の無限個の個体からなるということが前提とされている）。当然、Mのもとで、この理論は真となる。ところで、Mと「本当の世界」とは濃度が同じなのだから、両者の間には一対一対応が成り立つ。そうすると、この一対一対応を通じて、「本当の世界」も、この理論のモデルとなってしまうのである。これは、この理論が「本当の世界」に関しても真であるということを意味する。このようにして、「この理論はたとえ理想的であっても、『本当の世界』からすると偽であるかもしれない」という主張は、不可解なものとなってしまう。つまり、この議論によれば、形而上学的実在論者が「理想的理論でさえも『本当は偽』でありうる」というときの「本当は偽」とはどういうことかが、理解不可能となるのである。[5]

四　批判

最後に、いまみたパトナムの論証に対する批判を検討することとしよう。批判者によっては、「この論証は既に決定的に論駁された」[6]というものまでいる。様々な批判のうちで、批判者の多くに共通にみられる批判点をここではみてみることとしたい。[7]

パトナムの論証が成り立つのは、多くの解釈が我々の理想的理論の解釈として許容されてしまうからである。例えば、当の理論に文「a∈A」が属するとしよう。パトナムの論証によれば、もし世界そのものにおいて、$w_1 \in W_1$が成り立っているようなw_1とW_1とがみいだされるならば（それはMと世界との一対一対応を通じて必ずみいだされるのであるが）、「a∈A」が$w_1 \in W_1$を表す（「a」はw_1を指示し、「A」はW_1を指示する）という解釈が許されてしまうのである。[8]当の理論に属する文（つまり、当の理論の定理）はすべて真とみなされている。パトナムの論証では、真とみなされているそうした文すべてを真にするような解釈はどれも「許容される解釈」であると考えられているのである。しかし、解釈を決定するファクターは、それだけなのであろうか？解釈をひとつに確定するのにはたらく「さらなるファクター」が存在し、そのファクターによって解釈はひとつに確定し、それによってパトナムの論証は成り立たなくなるのではなかろうか？そうしたさらなるファクターによって、「a」はw_1ではなくw_2を指示し、「A」はW_2を指示し、従って、「a∈A」は$w_2 \in W_2$を表すということが確定するとしよう。もしそ

うなれば、形而上学的実在論者は、「a∈A」が真であるのは本当の世界において実際に $w_2 \in W_2$ が成り立っているときに限る、ということができるであろう。そして彼は、「たとえどんなに『a∈A』が検証されているとしても、本当の世界においては $w_2 \in W_2$ が成り立っていないかもしれないのであるから、『a∈A』は本当は偽かもしれない」ということができるであろう。

実際には、ある言語の名辞を解釈する際の手がかりとして、その名辞を含む各文がどんなときに真とみなされるかという点に訴えることができる。例えば、"A cat"といった文は、ねこが目の前にいる場合に限って真とみなされる。こうした文は、クワインが「観察文」と呼んだものであり、こうした文の場合、その文が何について語っているかは、それが真とみなされる条件から、容易に特定できるように思われる。"A cat"は、ねこが目の前にいる場合に限って真とみなされる文なのであるから、この文は、ねこについて語っている文に違いない、というようにである。そして、観察に直接結びついていない文に関しても、観察文の解釈を基礎において、そこからさらに解釈を推し進めてゆけば、いずれはどうにか確定した解釈が可能になるだろうと思われる。パトナムも、解釈の際のこうした手がかりを、解釈における一種の制約（パトナムはこれを「操作的制約」と呼ぶ）とみなした。しかし、クワインは、このような制約によっては、名辞が何を指示するかをひとつに確定することはできないということを示した。これが、クワインの「指示の不可測性テーゼ」である。パトナムも、個々の名辞の指示を、文全体の真理条件から、いわば間接的に固定しようとする右のような方法は、うまくいかないと考える。

右のような方法では、名辞が何を指示するかに関する解釈をひとつに決定できないということを、パトナムの例に従ってみてみよう。「ねこがマットの上にいる」という文の解釈を考えよう。通常の解釈（これを、解釈(1)と呼ぼう）によれば、この文が真となる条件は、ねこがマットの上にいる（(∃x)(∃y)〔(xはねこである)&(yはマットである)&(xはyの上にいる)〕）ことである。この解釈によれば、「ねこ」はねこを指示し、「マット」はマットを指示することとなる。さて、次に、「ねこ」と「マット」の指示に関する、尋常ではない解釈（これを、解釈(2)と呼ぼう）を提示しよう。まず、全可能世界を次の三つに分ける。

(a) 何らかのねこが何らかのマットの上にいて、しかも、何らかのからすが何らかの木の上にいるような可能世界

(b) 何らかのねこが何らかのマットの上にいて、しかも、どのからすも、どの木の上にもいない（木に止まっているからすはいない）ような可能世界

(c) (a)と(b)以外の可能世界

ここでの「AはBの上にいる」という表現は無時制であり、過去、現在、未来のいずれかの時にAがBの上にいるということを意味している。現実の世界は(a)である。次に、「ねこ＊である」「マット＊である」という性質を、次のように定義しよう。

xはねこ＊である＝〔(a)が成り立つ)&(xはからすである)〕＜〔(b)が成り立つ)&(xはねこである)〕＜〔(c)が成り立つ)&(xはからすである)〕

xはマット＊である＝｜(a)が成り立つ)&(xは木である)｜＜｜(c)が成り立つ)&(xはマットである)｜＜｜(c)が成り立つ)&(xはクォークである)｜

解釈(2)とは、文「ねこがマットの上にいる」が真となる条件は、ねこ＊がマット＊の上にいることだと主張するものである。（ここで、「～が…の上にいる」の解釈は、通常のままであるとする。）ここで、あらゆる可能世界において、文「ねこがマットの上にいる」に対して解釈(1)が与える真理条件と、解釈(2)が与える真理条件とが同値となることに注意しよう。つまり、ふたつの解釈に基づいて、文「ねこがマットの上にいる」に付与される真理値は、すべての可能世界にわたって、常に一致するのである。例えば、(a)のタイプの可能世界においては、文「ねこがマットの上にいる」は、解釈(1)のもとでは、ねこがマットの上にいるときに限って真であり、解釈(2)によれば、からすが木の上にいるときに限って真である。(a)のタイプの可能世界では、ねこもマットの上にいるし、からすも木の上にいるのだから、どちらの解釈を採ったとしても、この文は真となる。ところが、解釈(2)によれば、現実世界を含む(a)のタイプの世界では、「ねこがマットの上にいる」はからすが木の上にいるということを意味するのである。つまり、解釈(2)によれば、現実世界では、「ねこ」はからすを、「マット」は木を指示しているということになってしまうのである。このようにして、もし、名辞の指示を決定する要因が、「ねこがマットの上にいる」といったような文がどんなときに真とされるかに関する情報のみであるのならば、解釈(2)のような尋常でない解釈を排除できないということになるのである。[9]

以上のようなパトナムの議論に対して、どのような反応が予想されるであろうか？問題のひとつは、ねこ＊という（奇妙な）性質であろう。我々は、目の前のものをみて、「これはねこだ」という判断を下せる。しかし、何かに関して、それがねこ＊かどうかという判断は、明らかに下せないであろう。例えば、我々は、ねこを見ることができる。しかし、我々には、ねこ＊なるものを見ることはできない。しかし、こういった指摘に対して、パトナムはこたえを持っている。パトナムによれば、このような指摘は、いま我々が目の前にしているパラドキシカルな事態を解決する助けにはならない。「我々はねこを見ることはできるが、ねこ＊を見ることはできない」と言うだけでは、駄目なのである。というのも、ここで今度は、「見る」を再解釈して、誰かが「ねこを見る」という文を、〈ねこを見る〉という意味に解釈することも、〈ねこ＊を見る＊〉という意味に解釈することもできるからである。（ここで、もちろん、〈ねこを見る〉と〈ねこ＊を見る＊〉とは、あらゆる可能世界で同じ真理値を持つようになっている。）これが、パトナムの"just more theory" argumentである。パトナムは、「ねこかどうかを検査して、見分ける機械は作れるかもしれないが、ねこ＊かどうかを検査して、見分ける機械を作ることはできないのではないか」という、同様のありうる指摘に対して、次のように述べる。「要点は、ものを検査して、それがねこかどうかを見分ける機械を組み立てることができるという事実によってねこがねこ＊から区別されるのは、『検査』や『見分ける』が検査することや見分けることを指示する、ということに確信が持てる場合であり、しかし、これらの

語の指示がどのように固定されるのかを言うことは、『ねこ』の指示がどのように決まるのかを言うのと同じくらい難しい、ということなのである。[10]」言語の各々の語の指示が確定していないのではないか、という問題を前にして、その言語のさらなることばを持ち出してきても、無駄なのである。というのも、そもそも、そのことばの指示もまた問題となるからである。[11]

ようやくここで、パトナムに対する批判の議論に登場してもらおう。パトナムの論証が成り立つためには、名辞の解釈を決定する要因が、文がどのような場合に真とみなされるかに関する情報だけであるという前提が必要であった。そこで、多くの批判者は、次のようにパトナムに反論する。語の指示を確定する要因となるものは、文の真理値や真理条件だけではない。他にもあるのだ。その要因とは、「xがyを指示するのは、xがyに対してRという関係にあるときに限る」という形で示されうるようなある関係Rである。このRは、ある物理的関係、語の使用とその語の指示対象との間に成り立つ何らかの因果関係であると考えられる。そうした因果関係が、xという語が何を指示するかを決定しているのだ、と批判者たちはいうのである。

こうした批判に対して、パトナムは返答を用意している。それは、"just more theory" argumentである。「『ねこ』がねこ＊ではなく（従って、現実世界では、からすではなく）、ねこを指示するということを決定付けるような、何らかの因果関係が『ねこ』の使用とねこの間にはあるのだ」という主張に対して、ここで言われている「因果関係」を、因果関係＊を表すものと解釈することが可能である。つまり、「ねこ」がねこと、いま考えられている因果関係にあるとき、そのときに限って、「ねこ」がねこ＊と因果関係＊にあるということになるように、「因果関係＊」を定義することができるのである。「ここで、指示の『因果』説が何の助けにもならない（ならないだろう）ということに留意せよ。というのも、語『原因である』がいかにして確定的な指示をもつかは、…『ねこ』がいかにして確定的な指示を持つかということと同じくらい難問だからである。[12]」

さて、このようなパトナムの返答をどう考えたらよいだろうか。パトナムの批判者たちは、再批判の議論を用意している。例えば、クリーヴは次のようにいう。「パトナムの批判者の何人かは、因果説に対するこのような（パトナムの）反論が、完全に間違ったものであると考えてきた。彼らは、因果説を提起するというのは、『単に理論を付け加えているだけ（just add more theory）』なのではなく、指示に外的な制約を、理論の内部からではなく、理論の外側からはたらく制約を課しているのだ、と指摘してきた。[13]」

実は、パトナム自身が、「指示の因果説」の提唱者である。しかし、彼自身の指示の因果説は、いま検討しているような指示の不確定性の問題を解決するものではない、つまり、「語がそもそもある決まった指示を獲得できるようになるのはどのようにしてか…という問いに答えようとするものではない[14]」とパトナムはいう。他方、批判者たちが持ち出してきているような指示の因果説に対しては、パトナムは、まさに指示という関係であるような外的関係Rを想定することは、「形而上学的に説明不可能な事実[15]」を持ち出すに等し

いと述べる。このように、パトナムとその論敵は、両者ともに譲らず、その対立に決着はついていない[16]。

パトナムの論証は、これまでみたように、問題をはらむ。しかし、パトナムが示そうとしている問題は、興味深い真性の哲学的問題であると思う。経験を完全に超えているもの、決して「目には見えないもの」をめぐる問題は、これからも生き続けるのである。

注

(1) 以下の議論については、Carnap, R., *Philisophy and Logical Syntax*, Thoemmes Press,1996, pp.10-12を参照。なお、同書におけるカルナップの目的は、あくまで、彼の哲学のわかりやすい解説であって、その厳密で体系的な展開ではない。

(2) *Ibid.*, p.15.

(3) Putnam, H., *Reason Truth and History*, Cambridge University Press, 1981, pp.5-6.なお、「水槽の中の脳」の議論については、拙論「レーヴェンハイム＝スコーレムの定理とその哲学的問題」、『哲学・思想論叢』第十六号、筑波大学哲学・思想学会、一九九八年、六十三-七十四頁も参照。

(4) Putnam, *op. cit.*, p.6.

(5) ここにあげたパトナムの論証は、Putnam, H., *Meaning and Moral Sciences*, Routledge & Kegan Paul, 1978, pp.125-6のものである。また、パトナムの形而上学的実在論批判の議論とレーヴェンハイム＝スコーレムの定理の詳細については、前掲の拙論「レーヴェンハイム＝スコーレムの定理とその哲学的問題」を参照。

(6) Garcia-Carpintero, M., "The model-theoretic argument: Another turn of the screw", *Erkenntnis*, Vol.44, 1996, p.305.

(7) 以下でみる、指示の因果説によるパトナム批判は、次の諸論文で展開されている。Brueckner, A.L., "Putnam's model-theoretic argumrnt against metaphysical realism", *Analysis*, XLIV, 1984, pp.134-40. Cleve, J.V., "Semantic supervenience and referential indeterminacy", *Journal of Philosophy*, Vol.LXXXIX, pp.344-61. Lewis,D., "Patnam's paradox", *Australasian Journal of Philosophy*, Vol.LXII, 1984, pp.221-36.

(8) 実際には、理論の文は複数個あるので、この例のように単純にはいかない。「許容される解釈」は、当の理論に属する（複数個の）文のすべてを一斉に真にするようなものでなくてはならない。

(9) 以上の議論は、Putnam, *Reason Truth and History*, pp.33-5にある。

(10) *Ibid.*, p.37.

(11) パトナムのように、「語一般の指示が不確定なのではないか、ということを問題としているときに、新たな語を用いて、語の指示が確定するということを説明しようとしても、その説明は役に立たない。なぜなら、そもそも、その説明で用いた語の指示そのものもまた、問題視されうるから」というのであれば、いかなる「さらなる説明」も役に立たないと思われる。実際、指示の不確定性という問題に対するパトナム自身の解決策

は、そもそも指示の不確定性という問題そのものがでてこないように観点を代える、というものであって、指示を確定するさらなるファクターを持ち出す、というものではない。

(12) Putnam, *Meaning and Moral Sciences*, p.126.

(13) Cleve, J.V., "Semantic supervenience and referential indeterminacy", p.349.

(14) Putnam, H., *Realism and Reason: Philosophical Papers vol.3*, Cambridge University Press, 1983, p.17. パトナムの指示の因果説の議論は、何らかの表現によって指示しようと我々が望む特定の対象をピックアップし、さらに、そのピックアップされた対象に何らかの名前を与えるということが我々にできる、ということを前提としている。彼の指示の因果説は、このことを前提とした上で、もし確定記述によって指示が固定されるのではないとしたら何が指示を固定するのか、という問題に答えようとしたものである。他方、指示の不確定説において問題となっているのは、そもそも特定の対象を指示対象としてピックアップするということが我々にはできないのではないか、という点なのである。この議論については、Putnam, *Reason Truth and History*, pp.46-7 も参照。

(15) Putnam, H., *Reason Truth and History*, p.46.

(16) 例えば、Brueckner や Cleve は、前掲の論文において、パトナムの「Rは、形而上学的に説明不可能な事実となってしまう」という主張に対して再々反論を用意している。また、Garcia-Carpintero は、前掲の論文において、「理論を真にする解釈はどれも許容される解釈である」というパトナム流の考え方を "verificationist point" と呼び、この考え方自体が既に実在論と対立しているのであって、モデル論的論証は余計な議論だと主張している。また、指示の因果説からの批判の他に、G.H. Merrill は、"The model-theoretic argument against realism", *Philosophy of Science*, Vol.47, 1980, pp.69-81 において、対象が本質を持つと考える形而上学的実在論者にはパトナムの論証は通用しない、という注目すべき議論を展開した。他方、パトナムは、ものが本質を持つという考えを批判する議論を用意している。こちらのほうの争点も非常に興味深いものであるが、本論文では触れる余裕がなかった。

(なかむら・まさとし)